



平和と和解を築く人 宣教女シスター マリア・トロンカッティ

シート 9

Sr.マリア・トロンカッティの生涯におけるマリア的次元

導入

聖マリア・トロンカッティ(1883-1969)(サレジアン・シスターズの宣教女)は、聖母マリアの汚れなきみ心への並外れた信心を示し、それは彼女の霊的生活と宣教活動のすべてを形作りました。聖母への深い結びつきは、彼女が14歳のとき、故郷コルテノ・ゴルジで修道会「サレジアン・シスターズ」に情熱をもって入会した頃から始まっています。

エクアドルでの宣教活動の間、シスター マリアは導きと保護を求めて常に聖母に心を向け、「無原罪の聖母」をしばしば危険な状況の中で呼び求め、また聖母の取り次ぎによって奇跡的な癒しがもたらされることもありました。

ロザリオは彼女にとって、もっとも大切な祈りでした。早朝のロザリオの祈りへの参加を聖なる務めとし、一日を通して「アヴェ・マリアを蒔く」ように暮らし、イエスとマリアと絶えず語り合っていたのです。

シスター マリアの深いマリア信心は個人的なものにとどまらず、彼女と出会うすべての人と分かち合われていました。彼女は人々に「聖母を深く愛すること」、そして試練のときにもマリアの母としての守りに信頼することを教えていたのです。



神の言葉

聖母マリアが十字架の足もとで、御子とともに苦しみながらも、その使命に常に忠実であり続けたように、シスター マリア・トロンカッティもまた、アマゾンの森林で同じ精神を生き抜きました。

聖母マリアが愛する弟子を託され、教会の母となったように、シスター マリアも霊的な母として先住民の人々を大切に世話しました。聖母マリアが十字架の足もとで教会の母となられたように、シスター マリアは先住民の共同体にとって「母」となる存在であり、「マドレシータ・ブエナ(やさしい小さなお母さん)」と呼ばれるほどでした。

彼女の生涯は、真のマリア信心とは、単なる祈りだけでなく、あらゆる苦しみに寄り添い、聖母マリアが教会に示したのと同じ母性を表し、そして最も困難な状況においても神に全的に信頼することである、ということを私たちに示しています。

ヨハネによる福音(19章 25節-27節)

イエスの十字架のそばには、イエスの母と、その姉妹、クロパの妻マリアと、マグダラのマリアとが立っていた。イエスは、母と、そのそばにいる愛する弟子とを見て、母に言われた。「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です。」それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子は、イエスの母を自分の家に引き取った。



Video: 「シスター カルラ・レステッリのシスター マリアのマリア的霊性についての証言」

<https://www.youtube.com/watch?v=7KJzTgLICu8>



Sr. マリア・トロンカッティの伝記から

この出来事は、シスター マリア・トロンカッティが、いかに深い信仰を持ち、すべてを神と聖母にゆだねていた女性であったかを示しています。命にかかわる脅しの下、簡単な道具だけで手術をしなければならないという不可能ともいえる状況に直面した時、彼女は自分の医療知識だけに頼ったのではなく、祈り、聖母マリアの助けを願い求めました。

彼女が「奇跡」と呼んだその手術の成功は、彼女の信仰がその使徒職の働きをどれほど導いていたかを明らかにしています。この劇的な瞬間は、彼女の宣教の歩みを大きく変えました。先住民の人々は彼女を尊敬し、守るようになり、神に導かれた癒し手としての名声は確固たるものとなったのです。

「手術室」での生死を分ける瞬間

その日、小さな集落に定住しているわずかな住民たちに加え、森から来た多くの人々——およそ80名ほど——がそこにいた。彼らは笑ってはいなかった。決然としており、武装していた。矢、ナイフ、吹き矢、そして（高度な文明の“しるし”ともいえる）小銃やカービン銃まで手にしていた。

彼らは「奇跡」を求めていた。それを怠る者には、即座の処刑が下されるという…きわめて「正当な」要求であった。彼らの頭(かしら)の名はフアंकといった。

数日前、いくつかの部族・集団の間で激しい戦いがあった。ひとりの少女が撃たれ、その体内には破壊的な弾丸が残っていた。手術をしなければ救うことはできなかったが、宣教所の誰も、彼女の体からその弾丸を取り出すという重大な処置に踏み切ることができなかった。その間に化膿が始まってしまったのである。

彼らは「体の母(医療を司る者)」の帰りを待っていた。宣教所の人々はその腕前を信頼し、その他の者たちは一種の「挑戦」的な気持ちからであった。

頭(かしら)はシスター マリアに言った。

「お前、治す……お前、弾 並べる…… もし治さないなら、マカスへは通さない。もし救わないなら、我ら 皆に死 与える……」

シスター マリアが本当に、自分が「死を与えられる」のだと感じたのだろうか。そう、彼女はその言葉が単なる脅しではないことを理解していた。これは「火の試練」であり、「神の裁き」であった。

実際、証言者たちが語るところによれば、この地には「良い」先住民——川の渡し場で喜びとともにシスターたちを迎えた人々——と、「悪い」あるいは警戒心の強い先住民——ミッションで彼女たちを待ち構えていた人々——という二種類の人々がいたわけではなかった。

そこにいたのはただ一つのタイプの先住民であった。すなわち、絶対的な忠誠を示すこともできれば、完全な反発を示すこともできる人々である。彼らは何よりもまず、自分たちの自由を守ることが差し迫った務めであると感じていたのである。見知らぬ世界からこの密林にやって来た、あの奇妙な女たちは、否応なく審査を受けなければならなかった。その審査に落ちれば、待っているのはただ死のみであった。

彼らがシスター マリアに求めた務めは、途方もない「通行許可証」のようなものだった。密林に来た目的が「支配や命令」ではなく、「仕えるため」であることを示さなければならなかったのである。ましてや、優越感からくる「教えてやる」という恩着せがましい態度など、決して許されるものではなかった。

そして、その間に立つ中間地点は存在しなかった。彼らはこう言わんばかりであった——「我々は厳密な条件を提示する。救済のための通行証が得られぬなら、猶予も、強制送還もなく、ただ即刻の処刑があるのみだ」と。

「もしお前が彼女を治すなら、お前を愛する。だが、もし死なせるなら、お前を殺す」。

「この象徴的な言葉は、愛か死か、そのどちらかの運命が、その場にいる他の者たちにも等しく下されることを意味する」。

一列になって、十人ほどの戦士たちが部屋の中に入ってきた。彼らは壁に背をつけ、彫像のように動かず、新たに来た彼女(シスター マリア)に鋭い視線を向け続けた。

フアंकの合図で、母親に支えられた負傷した少女が部屋に入ってきた。彼らは少女をテーブルの上に横たえた。シスター マリアは震えが止まらなかった。目を伏せたまま、その場に立ち尽くしていた。そこで、コミン司教が言った。「シスター マリア、しっかりしなさい！ 始めなければなりません。」

十年ほど前、戦時中に、ヴァラツツェで似たような処置をしたことがあった。しかし当時は、少なくとも「必要最低限」のものは揃っていた。ここでは、用意できたのはただひとつ——ヨードチンキの小瓶だけだった。

聖母マリアは、自分が「正式な外科医」でもあることを思い出してくださるだろうか。

シスター マリア は、熱湯と数枚の清潔な布を求め、それから大きなポケットから折りたたみ式の小さなナイフを取り出した。肘までしっかりと洗えるように、幸いにも石けんがあり、彼女は一種のシーツのようなもので腕

を覆った。13歳の少女は、高熱で、とても良くない状態だった。シスター マリア が小さなナイフを熱湯に浸しているあいだ、宣教師たちとシスターたちは祈りに退いた。

その病人にはすでに呪術師が手を下して、おそらく彼の怪しげな薬草が感染をさらに悪化させていたかもしれない……少女の腕はひどく腫れ上がり、危険な状態にあった。

シスター マリア はヨードチンキで消毒したが、キバリ族の人々は互いに目配せしながら「なぜ黒く塗るのだ？」と不思議がっていた。

それから、主に深く呼びかけつつ、震えの消えた手で切開を加えた。汚れた膿とともに、まるで銃の新たな一発のように、弾丸が飛び出し、床に落ちて「タツ」と音を立てた。父親は得意げにそれを拾い上げ、ほかの者たちとともに踊り出した。その踊りには、あらゆる意味が込められていた。友情の誓いも含めて。

消毒し包帯を巻きながら、シスター マリア は少女に優しく微笑んだ。少女は一言のうめき声すら上げず、すべてに耐えていた。

小屋の外では、シスターたちが葉で作る寝床を準備していた。そこへ戦士たちが列をなして通り過ぎ、族長はこう言った。「わたしたち、いま助ける…… みんな通る……」。

シスター マリア にとって、その夜は徹夜の看護となった。手術を受けた少女のそばで、苦しみ、熱が引かないままの少女を見守った。彼女は粗末な寝床に横になっては、また起きて少女を慰めた。祈り、耳を澄ました。森の中にはタンタン——キバリ族の言い方ではトウトウイ——中をくり抜き、さまざまな模様が刻まれた木製の大きな太鼓が響いていた。強弱さまざまな打撃、連続と間隔、休止が織り成す複雑な「文字」で、祭りや儀式を強調し、また遠くへメッセージを送るためのものだった。‘もちろんシスター マリア には意味が分からなかったが、その夜、太鼓のメッセージはおよそこう言っていた。「どんな呪術師よりも偉大な癒し手が来た。彼女には、いつまでも自由な通行を。彼女と共に歩く者にも。」

度々引用してきた家族宛の手紙の中で、シスター マリア はこう書いている。「ある娘に銃弾が撃ち込まれていて、コルベッリーニ神父が彼らに、私が「医者」だと言ったので、弾を取り出してほしいと頼まれました。想像してください。必要なものは何もなく、ただポケットに持っていた小さなナイフだけでした。マリア様が助けてくださいました。奇跡を見ました。心臓のそばにあった弾を取り出すことができたのです……」。

(マリア・コッリーノ 『すべてを捧げた一つの「はい」の恵み マリア トロンカッティ アマゾンの森の宣教師』 エッレディチ、ローマ、2012年、113-116 ページ)



振り返りのために

1. シスター マリア は、「マリア様は、ご自分が正式の外科医であることを思い出してくださるだろうか」と自問していました。
皆さんは、自分の力が直面する課題に対して十分ではないと感じるとき、どのようにマリア様に心を向けますか。
2. シスター マリア は、手術の成功をすべてマリア様のお働きによるものとし、自分の功績とせず「奇跡」と呼びました。
皆さんは、特に成功や達成の瞬間において、どのようにマリア様の取り次ぎをより深く認め、感謝することができるでしょうか。
3. シスター マリア の手の震えが、主への「深い呼びかけ」の後に止まったとき、祈りが恐れを勇気へと変えることが示されました。
皆さんも彼女のように、人生で最も脅かされる瞬間にあっても落ち着き、神のみ心に信頼して歩むことができるよう、どのようにマリア様への信心を深めることができるでしょうか。
4. シスター マリア が、人を癒すために自分の命をも危険にさらす姿勢は、まさにナザレのマリア自身の奉仕と犠牲の精神を映し出していました。
皆さんは、自分の力を超えているように思える難しい奉仕の行いに対しても、マリアの「フィアット（お言葉どおりに）」にならい、「はい」と応えるために、どのように歩もうとしていますか。



祈りのために（９・２５）

このひとときを、聖マリア トロンカッティへのこの公式の祈りで締めくくりましょう。

いつくしみ深い父よ、
あなたは、聖霊の働きによって、
サレジアン・シスターズであり勇敢な宣教師であった
聖マリア トロンカッティのうちに、
若者と貧しい人々への母のような愛を呼び起こして下さった方です。
どうかその取り次ぎによって、
私たちが願い求める恵みをお与えください。
そして、彼女のように、
和解と平和をつくり出す職人となることができますように。
私たちの主キリストによって。
アーメン。